

経験、 エクリチュール、 学知

——生表象の動的プロセス——

久保昭博 (京都大学)

証言は「文学」を変えたか？

——フランスの第一次世界
大戦戦争文学について

森千香子 (一橋大学)

郊外で「書く」

——在仏移民による

「自己の語り」をめぐる

一考察

菊地 暁 (京都大学)

ライフヒストリー・レポートの無謀と野望

——柳田民俗学を「追体験」する

コメンテーター

安田敏朗 (一橋大学)

2012年11月24日(土) 13時より

一橋大学 東キャンパス

国際研究館 4F 大教室 (中央線「国立」下車)

連絡先 森本淳生 (一橋大学) atsu.morimoto@r.hit-u.ac.jp

13:00-13:10

趣旨説明

13:10-14:10

証言は「文学」を変えたか？——フランスの第一次世界大戦戦争文学について

久保昭博（京都大学）

第一次世界大戦は、日記、回想録、小説など、ジャンルをまたがる証言的な戦争文学を大量に生み出した。その背景には、戦争の長期化、人類がかつて経験したことなかった規模の暴力という「事件性」に加え、第三共和政下の教育政策による識字率向上に伴って、新たに戦闘の主体となった「ボワリュ（＝毛むくじゃら）」と呼ばれる兵士が、自らの経験を語るべく筆を執るようになったという事情がある。すなわち「戦争の世紀」の幕開けであった第一次世界大戦は、同時に、アネット・ウィエヴィオルカの言い方を借りれば、「証言の時代」の始まりでもあったのである。

この戦争文学という現象は「文学」にいかに関与したのだろうか——これが今回の報告のテーマである。確かに証言的な戦争文学の流行は一過性の出来事であり、たいていの作品は文学的な価値を認められずに忘れ去られる運命にあった。しかしながら戦争を契機に書くことが「民主化」したことによって、「文学」が被った影響は皆無ではないと考えられる。今回は、自らも参戦し、その後証言的戦争文学を体系的に批評したジャン＝ノルトン・クリュの『証言者たち』（1929）、アルベール・ティボーデら当時の批評家の戦争文学に関する言説などを手がかりに、この影響関係を考察する。それにより、「生表象」と「文学」のせめぎ合う様を提示してみたい。

14:10-15:10

郊外で「書く」——在仏移民による「自己の語り」をめぐる一考察

森千香子（一橋大学）

1980年代以降、フランスでは大都市郊外に集住する旧植民地出身の移民二・三世の文化実践に関して膨大な社会学研究が蓄積されてきたが、その大半が話し言葉や歌などの「口承性」や、ダンスなどの「身体性」を論じたものであった。その一方で「文化」の重要なツールである「書く」行為に関しては、「読み書き能力」という学校教育の観点からその「不十分さ」を指摘する規範的分析がほとんどで、学校空間の外部で実践される「書く」行為はまるで存在しないかのように扱われてきた。本報告は、これまで看過されてきた「郊外の若者」の「書く」行為に光をあて、その具体的な実践内容や様式の多様性、それを通して立ち表れる「自己の語り」について現地調査に基づいて検討する。また調査の経験を手がかりに「研究者」と「対象者」の関係性についても考察したい。

15:10-15:30

休憩

15:30-16:30

ライフヒストリー・レポートの無謀と野望——柳田民俗学を「追体験」する

菊地 暁（京都大学）

民俗学にとってライフヒストリーは固有の対象／方法ではなく、また、標準化されたものでもないのだが、その歴史的事情を背景に、いくつかのユニークなライフヒストリー作品が生み出されたことは一考に価する。私見では、ライフヒストリーは、民俗学が文学（とりわけ自然主義文学）を否定的媒介として成立する経緯を端的に示すもののように考えられる。そう考える契機となったのが、報告者の担当講義の課題「ライフヒストリー・レポート」である。受講生に祖父母のライフヒストリーを書かせるという課題を実施するなかで報告者が直面した問題は、「個体発生は系統発生を繰り返す」という言葉のように、民俗学の創始者・柳田国男が全国各地の民俗学徒を糾合するにあたって直面した問題に近似するものとなった。本報告では、この「ライフヒストリー・レポート」の事例として、民俗学という生表象の発生を「追体験」してみたい。

16:30-18:00

テーブル・ロンド